

MailBox

メールボックス

経済同友会出向者からの近況報告 #1



From : 福嶋 正義

復興庁 宮城復興局 政策調査官
(東松島市 復興政策課 東松島みらいとし機構 常駐)

To : 経済同友会

Subject : 被災地に暮らし共に活動した4年間

宮城県東松島市に移り住んで4年が経過しました。この4年間で一言でいうならば、「サッカーと刺繍と漁業」です。

本題の前にこれまでの経緯を簡単に。東日本大震災の後、KDDI社内に復興支援室が立ち上がり、経済同友会を介した公募が出ていました。当時は海外関係の部署にいましたが、「海外の仕事をしている場合じゃない!」と勢いよく立候補。当室は社員を被災自治体へ出向させ、自治体職員と一緒に復興に取り組むスタイルです。こうして人生初の転勤先は東松島市に決まったのでした。ちなみに、最初の住居はもちろん仮設住宅でした。

さて、まず「サッカー」についてお話しします。出向が決まった日、「このまちには娯楽が何もないけれど大丈夫?」と市の方に心配されました。「サッカーができれば十分です!」と答え、その日のうちに市のサッカー部へ入部しました。今でも毎週水曜日の夜、練習しています。練習終了後は石巻のスーパー銭湯に行き、サッカーと仕事の疲れを取ります。その後、近くのファミリーレストランで打ち上げが始まります。運転手以外はお酒を飲みながら。こんなことをしていると、市役所内ほぼすべての部署に知り合いができ、ほかの市町から来ている派遣職員の方とも仲良くなれます。結果的にこれも一つの処世術だと気付きました。

次に、「刺繍」についてお話しします。通称、「東松島ステッチガールズ」という取り組みで、タレントの岡田美里さんが「刺繍を通して女性たちを元気づけたい!」と持ち込んだ企画でした。まず、市民を集めワークショップを行いました。参加者は最初こそ緊張していましたが、すぐにおしゃべりで騒がしくなり、人と話をするのが、こんなにも

人を元気にするものかと実感しました。この活動は復興庁の「新しい東北」先導モデル事業にも選定されました。3年たった今でも活動が継続できている理由の一つは、たくさんの関係者の協力の下、販路を確立できたことです。地元の主婦の方と共に、私もかなり刺繍ができるようになりました。

続いて、「漁業」についてお話しします。ここ2年、「IoTスマート漁業実証実験」を進めています。きっかけは、地元定置網漁師さんのお話で、「しけの次の日は魚が獲れる」「獲れ過ぎると魚価が暴落する(大漁貧乏)」といった漁師さんならではの知恵と、安定収入に対する課題意識からでした。まず、海中のデータを集めるハイテクなブイを開発しました。このブイは水温、潮流、塩分濃度等を定期的に収集し、収集されたデータをスマートフォンやタブレットから見るができます。次に、これらのデータから翌日の漁獲量を予測します。現時点では約7割の精度を達成しています。本年度、この取り組みは総務省の委託事業にも選定されました。朝4時の出港はこたえませんが、帰ってきて漁師さんと一緒に食べる朝ご飯は格別です。

結びに、ここに書ききれないことがたくさんありますが、どれも出向してこのまちに住まなければ得られなかった貴重な体験です。この4年間でお世話になったすべての方へ感謝を申し上げつつ、これからも「やってみよう」の精神で新しいことに取り組んでまいります。



東松島市サッカー部の皆さん



ステッチガールズによるオリジナルの刺繍作品